

特 別 寄 稿

(日頃「広報おのまち」をお読みの読者の方から、小野町の思い出について寄稿いただきました。)

『白線の中の思い出』

茨城県日立市

川 又 サヨ子さん (旧制郡司)

昭和25年飯豊中学校3年生の時、私はバレーボールの選手でした。

7人姉弟の母子家庭で、いつもなら1個の生卵を2人の姉妹で分け合って食べていましたが、その頃の母は、早朝練習に出かける私に茹で卵を持たせてくれました。

歩きながら食べて学校に着くと、山田博先生が、笑顔でみんなを迎えてくれました。

指導と部員の結束は元よりですが、運よく田村郡の決勝に迄進むことが出来ました。接戦の末、25対23で敗れましたが、精一ぱい戦った結果ですので、涙もなくからりとしたものでした。

コート内で考案した中衛センター二瓶シマ子さんのバックアタックの成功、また、高橋浪子さん(故人)のサウスポーからのサーブの威力は、相手コートを脅かしたものです。

応援に来てくれた郡司義隆先生が、私に汗をふくようにと白いガーゼのハンカチを差し出して下さったので、ホコリにまみれた顔をふいて洗わずにお返しした事が50余年脳裏に焼き付いていました。

3年前に郡司先生(現在96才)を訪ねて、ハンカチのお礼を述べ、洗わずに返した失礼を詫びて来た次第です。

また、この春の彼岸には、やさしく力強くご指導下さった亡き山田先生の家を訪ねて、お線香をあげさせて頂きました。

奥さんの京子先生と色々思い出話をし、博先生が新制中学最初の3年生担任の修学旅行の時、朝1番(6時台)の汽車に乗るのに、当日では大変だろうからと、先生の家の前に晩泊めて下さって出かけた話を聞いて、思いやりのある生徒に優しい先生だったんだなと、つくづく思いました。世の中皆貧しい時代でしたが、半世紀も過ぎると懐かしく、郷愁の念に駆られてペンを執りました。



(写真：お孫さんと)

平成17年度

少年の主張

作文コンクール開催

小野町青少年育成町民会議主催による、平成17年度少年の主張作文コンクール発表大会が7月13日小野中学校体育館で開催されました。この大会は、中学生が日ごろ考えていること、感じていることを発表することにより、社会の一員としての自覚を高めると共に、青少年の健全育成を図ることを目的に開かれています。

大会では、主催者挨拶に続き審査委員紹介のあと、1年生から順に発表が行なわれました。

発表者は、小野中・浮金中から各学年4名が選ばれ学校・家庭・社会等の身のまわりについて日頃考えていることをテーマに、それぞれの意見・体験を発表しました。

審査の結果は次のとおりです。(敬称略)

最優秀賞

「私の命の価値」
小野中3年 佐藤 美穂

優秀賞

「私たちに今必要なこと」
小野中3年 森川 実咲

「NO!もYES!も」

小野中2年 會田ほのか

「私の心に残る人」

浮金中2年 村上 貴大

「良い言葉の使い道」

小野中1年 香阪 四季

「不安から学んだこと」

小野中1年 吉田千奈美

努力賞

「リサイクル社会を目指して」
浮金中1年 藤井 理子

「あなたのたばこマナー」

小野中1年 吉田 育未

「愛犬ボブの死から学んだこと」

小野中2年 国分 麻貴

「戦争を受けとめて」

小野中2年 近野未沙紀

「今の自分と夢」

浮金中3年 藤井 遥香

「一人の人間として」

小野中3年 宗方 沙季

